あそぶ・まなぶ・語る

周防大島町総合体育館陸上競技場 ／ 日本ハワイ移民資料館
八幡生涯学習のむら ／ 宮本常一記念館

第39号
2022年8月

宮本常一記念館

龍門ゆかりの品

6月1日（水）、山口朝日放送（YAB）のニュース番組「Jチャンやまぐち」で、周防大島町家房出身の龍門好五郎が紹介されました。彼は文化4年（1807）に生まれ、本名は平原由五郎、身長226センチもある巨漢力士でした。

『大島町誌』（1959年）によると、龍門は手のひらに小銭10文を横に並べられたことから、「十文由」とも呼ばれていました。あまりの大食いに困った家の者は彼に四国のお大師めぐりをすすめます。その道中、伊予で大洲の城主が通りかかった際、「殿様の御通りに馬に乗った無礼者」ととがめられますが、よく見ると徒歩の龍門だった、という逸話もあります。

放映に先立つ5月17日（火）、テレビ局の取材班が小松にある旧田布施農業高等学校分校の体育館に来られました。同体育館には旧大島歴史民俗資料館の収蔵品などが移管されています。ここに龍門ゆかりの品もあり、当日はその撮影に立会いました。

写真は箸と茶碗です。茶椀が入っていた木箱の蓋には「此ノ什器ハ平原吉五郎ガ藤井槙太郎（日良居村）ノ方ニ寄食セシ折使用セシモノナリ」と記されています。龍門が実際に使っていた可能性が高いものです。箸は長さ約36㎝、径1.4㎝を測り、通常の2倍ほどあります。茶碗は直径約13㎝、口縁はやや外反し、薄く精巧です。写真のゾウリは後に作られたレプリカですが、長さ約35㎝、幅14㎝もあり、龍門の規格外の体躯を推し量ることができます。

そのほか、同体育館には旧大島町で使われていた民具が保管されています。興味のある方は、宮本常一記念館までご連絡いただければと思います。（板垣優河）

企画展と関連講座

八幡生涯学習のむら

■「周防大島の海のいきものと漁撈具」展を開催

海に囲まれた周防大島。ここでは生活の糧として、また子ども時代の遊びの思い出として、海のいきものたちは親しい存在でした。海のいきものとそれをとらえるための道具を写真パネルや実物で展示し、周防大島の人々の海のいきものへの観察眼や漁獲のための工夫について紹介します。

【期間】令和4年7月20日（水）～10月2日（日）
【休館日】月曜（祝日の場合はその翌日）
【場所】八幡生涯学習のむら　学びの間

■夏休み応援企画

企画展の開催中に、海のいきものや海の道具についてギャラリートークを開催します。アナゴをとるためのカゴや破れた網を修理するための針など、昔は漁師さんの手作りでした。今では珍しい漁業の道具について、専門の学芸員に質問をして夏休みの自由研究にしてみませんか。

■海の道具を知ろう！
【日時】8月20日（土）　午前10時～
【講師】徳毛敦洋氏（宮本常一記念館）
【問い合わせ】0820・72・2601

発行 周防大島町社会教育施設連携協議会　〒742-2512 山口県大島郡周防大島町平野417-11　宮本常一記念館内　TEL（0820）78-2514

ずっと気になっていた祖先の出身地

日本ハワイ移民資料館

それは、東京からの一本の電話相談から始まりました。「米国に移民した曾祖父が、大島出身です。大島のどこか知りたい。この春に小学5年の息子と一緒に訪問したい。」

その後すぐにメールで、米国のおばあさんのアルバムから数枚の写真が届きました。それはまさしく45年前の大島、久賀の学校等やお墓参りの写真でした。資料館で調べた渡航記録に曾祖父の名前を見つけることもでき、旧沖浦村出身で、大正4年（1915）に40才で渡航したことまで判明しました。

その連絡のあった親子が3月24日から数日間大島に滞在、ゲストハウスを利用し、役場や当館に来て調べ、「曾祖父は海運業を営んでいたけど、大きな会社の進出で仕事が先細り、米国に仕事を求めて渡ったと聞いています」と、伝わっている祖先の話をされました。それから写真等から場所が判明した曾祖父のお墓に親子で行かれました。

数日後、次のようなお礼のメールが届きました。

「（再度訪問した）資料館を出て久賀の検索ボランティアの方に会って写真風景や資料を見ていただいたら、韓国に渡った親戚の記録が分かり、新しいことを読み取れて感動的でした。その後八田八幡宮を見ました。雨が上がったので帯石にも行きたいと思いましたが、息子に反対され諦めました。また機会があれば見てみたいと思います。

最後に曾祖父のお墓に戻って花を供えました。隣の家を訪問してみました。出てきた方は高齢な方でしたが、なんと私のおばあさんの兄弟やその兄弟の子どもたちのことを覚えていて聞くことができました。会えてほんとうに嬉しかったです。

子どもの頃、日系4世として生まれ育った私にとっては、日本は遠い不思議な存在でした。おばあさんからもらったボンタンアメや綺麗な折り紙など、繋がらない断片だらけでした。その架空の「日本」を具体化したいと思って大学一年生の時から日本語や文化の勉強をスタートしました。その後、日本の会社に就職したり、日本人と結婚し日本に移住したりして、日本をある程度具体化できましたが、祖先の出身地はずっと気になり続けました。

この間、知り合いに「大島にまだ行っていないの？」と叱られたのがきっかけで訪問することにしました。観光ができたら嬉しい、それ以上は期待していませんでした。

しかし、日本ハワイ移民資料館の皆さんのおかげもあり、私の人生において大変貴重な経験になりました。祖先のことだけではなく、明治・大正時代の日本や日米の関係、大島のことなど、歴史の大きな流れをより深く理解できました。また、皆様の暖かさは何よりも宝物だと実感しました。心より御礼申し上げます。

（Y・A）（井倉清水）

ステップアップセミナー

6月24日（金）、学校教育課で行われた、学校の先生を対象としたステップアップセミナーの講師を担当しました。本セミナーの目的は、先生方に町内の歴史や文化を知っていただき、郷土学習指導に活かしてもらおうというものです。例年開催されているものですが、ここ数年はコロナ禍で制限されたものとなっていました。本年度は3年ぶりに対面での開催で、周防大島町長崎地区にある東和収蔵庫と服部屋敷（農村文化伝承館）を巡りました。（↖）

東和収蔵庫には国指定重要有形民俗文化財「周防大島東部の生産用具」3465点が収蔵されています。農具や漁具を中心としており、副業として養蚕や機織りに関するものなど旧東和町の人々の生活の一端がうかがえる民具となっています。限られた平地の中で、副業などを営みつつ暮らしてきた生活の実態を伝える民具であることをお話ししました。

服部屋敷は、「長州大工」として出稼ぎ先で知られた周防大島出身の職人の技法が結集された建物として、現在の地に移設保存されたものです。服部家は萩藩の士族として長崎を拠点としており、建物は明治18年（1885）に建てられました。中の特徴を紹介しつつ、この「長州大工」と同様に周防大島には出稼ぎ文化が盛んであったことを知っていただきました。

最後に屋敷の母屋で郷土学習事例を紹介しました。「あるく・みる・きく」という言葉は、宮本常一の学びの姿勢を象徴するものです。実際に現地を「あるく」、実物を「みる」、関係者に話を「きく」ことを徹底していました。宮本常一はこのフィールドワークが膨大な量におよぶことが特徴です。

事例として久賀のなむでん踊りをあげ、筆者の「あるく・みる・きく」実践例を資料として配付しました。踊りの起源や名称など、疑問とその解決手段をまとめて図示し、フィールドワークによってまとまった結論を見ていただきました。そして、子どもの実践発表の場として、宮本常一「あるく・みる・きく」コンクールや自由研究などがあることを紹介しました。

先生方は熱心に聞いてくださいました。「民具など実物を見ることの大事さを実感した」という意見や、「周防大島の歴史について新しく学んだ」という意見をいただきました。児童生徒が郷土学習や昔のくらしなどを学ぶ面で、今後も学校との連携を重視していきたいと考えています。（徳毛敦洋）

施設案内

周防大島町総合体育館

当施設ではお客様の心身の健康づくりのお役に立てるよう、運動推進・健康増進の案内とお手伝いを日々行っております。

今回は当施設で開催している教室を紹介します。興味のある方はお気軽にお問合せください。

●卓球クラブ●

卓球は、経験者の方はもちろん、初心者の方でも気軽に始めることができるスポーツです。日々の生活をより充実させるためにはじめてみませんか？　ラケットの貸出も無料です。経験者の方はもちろん、初心者の方も大歓迎です。

場所：体育館アリーナ
時間：火曜日午後6時30分～午後8時30分　金曜日午後1時30分～午後3時30分
参加費：月会費100円　備品代年間300円

●エアロビクス●

音楽に合わせたリズミカルな有酸素運動は、爽快感を味わえます♪

エアロビクスは、有酸素性運動の代表的な運動です。低～中等度の全身運動を長時間（20分以上）行うもので、安全性が高く、年齢・性別に関係なく万人に適した運動です。月に一度身体を整えるコンディショニングの時間もあります。

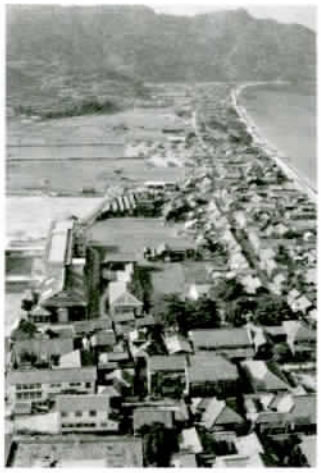
場所：体育館アリーナ
時間：毎週水曜日　午後7時30分～午後8時30分
参加費：月3000円　体験も受け付けております！

●トレーニングルーム●

当施設には各種トレーニングに対応できるマシンを設置した「トレーニングルーム」があります。健康維持向上、シェイプアップ、筋力アップなど様々なリクエストにお応えできるトレーニング器具を揃えております。なお、初めての方は初回講習会の受講が必要となっております。見学は自由ですのでお気軽にお立ち寄りください。

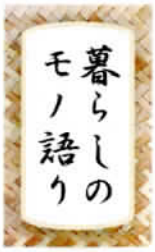
利用料金：1回　220円

これは久賀の町を東から見下ろした写真で、宮本常一が昭和41年（1966）の12月に撮影したものです。町屋を東西に貫くように道が通り、北面する海岸には白い砂浜が細長く残ります。この頃はまだ埋立てが進んでおらず、国道437号線（バイパス）も未整備でした。町屋を貫く道が当時のメインストリートで、そこはまた、久賀内外の人々にとっての交流の場でもありました。



久賀の歴史は古く、鎌倉時代の歴史書『吾妻鑑』には「久賀保」という名が見えますので、かつては公領であったことが分かります。その後、名田が発達して「久賀荘」と呼ばれるようになり、江戸時代には萩藩の直領地として、勘場がおかれました。町の背後には水田が広がっています。一枚一枚の水田は東西・南北方向にそれぞれ直線的で、そのなかには平安時代の条里整田を思わせるものがあるといいます。また、山裾に重々として見られる棚田からは、この地を余すことなく生産の場としようとした人々の意志が感じられます。現在、平地の水田は宅地造成によって消滅し、周防大島町久賀庁舎などはその上に建っています。棚田はミカン畑への転換が進む一方、耕作放棄されてしまったところも多く見られます。

撮影者の宮本常一は、『私の日本地図9』（1971年）のなかで、久賀の町を「大島の中でも町らしい町」などと表現しています。この写真は、そうした久賀の性格を端的に示す、最も「久賀らしい写真」の一枚と言えそうです。（板垣優河）



六万点の民具から…

醤油徳利

醤油を入れて持ち運ぶための徳利です。高さ27センチ、白磁製のシャープな形は江戸時代に長崎出島からヨーロッパへ醤油や酒醤油をつめて輸出されたコンプラ瓶を思わせます。

久賀に残るこの醤油徳利の胴には「最上醤油一〆五」、反対側には「久賀町升井醤油店」の店名と電話番号が書かれており、久賀町の升井醤油店のものとわかります。屋号入りのこのようなタイプの徳利は醤油だけでなく酢や酒などにもあり、貧乏徳利あるいは通い徳利とも呼ばれました。当時は必要な分を買う計り売り、支払いはつけ払いで盆暮れにまとめて払うという買い方が一般的でした。そこで小売店では客の持ち帰り用にこのような徳利を貸し出したのです。借りた客はまた次も買いに来てくれるので、お得意様との縁を深めるために大切なものでもありました。また、屋号入りの徳利は客が持ち運ぶ時に人目に触れることで宣伝効果も期待できました。

このような徳利が農村部にまで普及したのは明治以降といわれます。農家などでは酒や醤油は自家製造のものが多く、店から徳利にいれて買ってくるという習慣はなかったと考えられます。ところが明治33年（1900）に自家製醤油に課税されることになると、久賀でも醤油や酒の専門業者が増えてきました。醤油や酒の醸造場は津原川沿いに分布し、大きな建物が並ぶ景観が作られました。川沿いという立地は荷を運ぶのにも便利だったのでしょう。昭和の初め頃、久賀には4軒の醤油製造家があったと伝えられます。中でも升井家は幕末頃から醤油作りを始めたといわれ、手広く商売を行っていたようです。この醤油徳利には「No.97」と番号がつけられています。貸出番号をつけて顧客管理をしていたのでしょうか。貸出用の焼き物の徳利はガラス瓶が普及するとその姿を消していきます。暮らしぶりが変わっていく様子が感じられる道具です。（古賀瑞枝）